明暗評釈　四

第二章（中）

鳥井正晴

初出

大正五年（一九一六年）五月二十七日・「東京朝日新聞」。
大正五年（一九一六年）五月二十六日・「大阪朝日新聞」。

評釈

③【「精神界も同じ事だ。精神界も全く同じ事だ。何時どう変るか分らない。さうして其変る所を己は見たのだ」】

㈠、①、第百八十四章に、〈「所が左右でないよ。生きてる癖に生れ変る人がいくらでもあるんだから」〉と、ある。

②、第七十九章に、〈お延の眼には其時の彼がちら〳〵した。其時の彼は今の彼と別人ではなかつた。といつて、今の彼と同人でもなかつた。平たく云へば、同じ人が変つたのであつた。〉と、ある。

㈡、玉井敬之の、〈漱石の展開『明暗』をめぐって〉（日本文学協会編『「日本文学講座」第六巻・近代小説』、大修館書店、昭和六十三年（一九八八年）六月）に、次の指摘がある。

〈『明暗』は津田の「意識」の様相をえがくことからはじめられた。　（中略）
津田由雄は、肉体と精神が「何時どう変るか分らない」という認識を持った人物として設定された。このように設

定されることによって、津田は、意識の、また人間の心理の探究者たるにふさわしい人物として、『明暗』の舞台に登場したといえるだろう。しかしとはいっても、津田は、『彼岸過迄』の敬太郎や、『行人』の二郎や、『こゝろ』の「私」のような観察者ないし探究者ではない。　（中略）

このことは肉体と精神の変が津田一人のことではなく、登場人物たちのすべてに起りうる可能性があることを意味する。（P.119）〉

と同時に、次の見解がある。

㈢、①、越智治雄の、〈座談会《日本文学通史への試み》　漱石――その宿命と相対化精神〉（『群像』第29巻第10号、講談社、昭和四十九年（一九七四年）十月）に、次の見解がある。

〈津田は、冒頭の、肉体も精神もいつどんな変に会うかわからないと思うあたりは、ずい分深いものを托されているのだけれど、全体的にはあいまいな存在として書かれていますね。（P.254）〉

②、石井和夫の、〈共同討議『明暗』と則天去私〉（『國文學』第23巻第6号、学燈社、昭和五十三年（一九七八年）五月）にも、次の指摘がある。

〈二章に出てくる、カッコのついた津田の独白体がありますね、そのことばの重みというのはぼくよくわかるのですが、その重みを感じれば感じるほど、津田自身の意識から出てくることばとしては、なにか遊離している部分があるのじゃないかなという感じが最後までするんですけれどもね。（P.162）〉

④【彼の心のうち】

『明暗』の、第二章には、彼という三人称が、二十四回も頻出する。

人の心のうちを、八百五十倍にまで拡大してみせる、徹底した心理小説で『明暗』はあって、だからここでも、作者のカメラの眼は、津田の内奥（近景）に、深く潜り込む。

と同時に、突然「心の中で叫」び、「思はず唇を固く結」び、「考へつゞけ」る津田を、一歩さがって、遠景に撮影する作者のカメラの眼が、濃厚に顕在する。このことが、津田を描いても、彼という突き放した三人称に、視点されることになる。

比喩として云えば、『明暗』の作者は、あくまで覚めていて、常に、登場人物の外（そと）にいる、外から凝視している、と云える。

⑤【暗い不可思議な力】

㈠、第百七十三章に、〈御前の未来はまだ現前しないのだよ。お前の過去にあつた一条の不可思議より、まだ幾倍かの不可思議を有つてゐるかも知れないのだよ。過去の不可思議を解くために、自分の思ひ通りのものを未来に要求して、今の自由を放り出さうとするお前は、馬鹿かな利巧かな〉と、ある。

㈡、①、『明暗』の前々作、『こゝろ』（大正三年）の、「下　先生と遺書」の第五十五章に、〈私は歯を食ひしばつて、何で他の邪魔をするのかと怒鳴り付けます。不可思議な力は冷かな声で笑ひます。〉と、ある。

②、そして、『こゝろ』の最終章、「下　先生と遺書」の第五十六章には、〈私は私の出来る限り此不可思議な私といふものを、貴方に解らせるやうに、今迄の叙述で己れを尽した積です。〉と、ある。

③、右の、『こゝろ』の「不可思議な私」について、越智治雄の、〈こゝろ〉（『漱石私論』所収、角川書店、昭和四十六年（一九七一年）六月）に、次の見解がある。

＜したがって、叔父との関係を語りつつ、先生が執拗に「私」に納得させようとしているのは、われわれが選び取ったと考えている人生が、けっして意識によって領略され尽くすものではないということなのだ。先生もまた実は何かに動かされてその生を生きてきた。先生の窮極の問はその何かに向けられている。「不可思議な私」（五十六）。（P.269）＞

津田は、「為る事はみんな自分の力で為、言ふ事は悉く自分の力で言」うという、すぐれて近代的自意識の徒である。しかるに、「右に行くべ」く意図した津田は、「左に押し遣」られている自己を発見し、「前に進むべ」く価値判断し、実行した津田は、「後ろに引き戻」されている自己を発見して、津田は驚愕する。

津田が、「選び取ったと考えている人生が、けっして意識によって領略され尽くすものではない」（越智治雄）。

㈢、「人生」の、あるいは「人間」の根底に横たわる、「不可思議」なるものへの洞察は、実は、漱石文学の原点でもある。既に、明治二十九年、「人生」と題された文章に、漱石は、その認識を語っている。

＜人生＞（第五高等学校『龍南会雑誌』、明治二十九年（一八九六年）十月）に、語る。

＜二点を求め得て之を通過する直線の方向を知るとは幾何学上の事、吾人の行為は二点を知り三点を知り、重ねて百点に至るとも、人生の方向を定むるに足らず、人生は一個の理窟に纏め得るものにあらずして、小説は一個の理窟を暗示するに過ぎざる以上は、「サイン」「コサイン」を使用して三角形の高さを測ると一般なり、吾人の心中には底なき三角形あり、二辺並行せる三角形あるを奈何せん、若し人生が数学的に説明し得るならば、若し与へられたる材料よりXなる人生が発見せらるゝならば、若し人間が人間の主宰たるを得るならば、若し詩人文人小説家が記載せる人生の外に人生なくんば、人生は余程便利にして、人間は余程えらきものなり、不測の変外界に起り、思ひがけぬ心は心の底より出で来る、容赦なく且乱暴に出で来る、海嘯と震災は、啻に三陸と濃尾に起るのみにあらず、亦自家三

寸の丹田中にあり、険呑なる哉〉

附記　『明暗』本文の引用は、岩波書店刊『「漱石全集」第七巻・明暗』（昭和四十一年六月二十三日第一刷発行　昭和五十年六月九日第二刷発行）に拠った。但し、旧字は、新字に改めた。

『こゝろ』本文、「人生」本文の引用も、右の全集に拠った。但し、旧字は、新字に改めた。

（平成6年9月24日）